

5-4					
主題	BPSD の緩和に向けた犬との触れ合いと職員の負担軽減についての検証				
副題	アニマルセラピー動物介在活動で心に癒しを				
キーワード 1	アニマルセラピー	キーワード 2	動物介在活動	研究(実践)期間	2 ヶ月

法人名・事業所名	社福)一誠会 グループホーム初音の杜
発表者(職種)	河西めぐみ(介護職員)
共同研究(実践)者	石井克昌(介護職員)

電 話	042-691-8289	F A X	042-692-1772
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	社会福祉法人一誠会は昭和 55 年特別養護老人ホーム偕楽園を開設し、平成 23 年 4 月「グループホーム初音の杜」を新たに開設。2 ユニット、定員 18 名(1 ユニット 9 名)。平均介護度 3.2、平均年齢 85.2 歳。平成 26 年 11 月には品質国際規格 ISO9001 の認証を取得しケアの質の向上に向け取り組んでいる。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成 26 年より当法人では、犬、猫、鳥、ウサギ、モルモットを飼育する事で、アニマルセラピー動物介在活動(以下アニマルセラピーと略す)を取り入れた取り組みを行っている。当グループホームではウサギ、モルモットを飼育しているが、餌をあげる程度の取り組みでアニマルセラピーを活用できずにいた。またグループホームでの課題として BPSD の強いご利用者のケアが課題となり職員の負担となっている。

研究対象者：A 氏 女性 要介護度 2 既往 アルツハイマー型認知症

帰宅の訴えが強く、強い思い込みも見られる方で、他のご利用者にも強い口調で注意や暴言が見られる。職員の声掛けにも取り合って頂けない状態が有り介護拒否も多い。帰宅の訴えに対しても「今日は帰れますよ」等の対処的な声掛けに至り、声掛け対応方法が見いだせずになっていた。その中で、A 氏はウサギを見ると、ウサギに声を掛けられ笑顔が見られていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

A 氏は動物がお好きな様子が有り、当法人でアニマルセラピーのために飼育している動物を使い A 氏の心の安定に繋がらないかと考えた。アニマルセラピーでは様々な効果が有る中、特に着目したのが「リラックス効果」である。「リラックス効果」では、・気持ちが落ち着く・攻撃性や暴力、怒りが抑えられる・気力が高まる・不安が和らぐ等といった効果が得られるという。(せせらぎメンタルクリニック科 HP 一部抜粋 2017 年 6 月 28 日) 認知症で心に不安を抱える A 氏だが、アニマルセラピーを行う事で、「リラックス効果」が期待でき、BPSD の緩和、QOL が向上すると仮説する。またアニマルセラピーでの共通な取り組みを通して、ケア方法が見出せ BPSD の緩和によって職員の負担の軽減ができると仮説した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①アニマルセラピーでは、法人内で最もご利用者ともコミュニケーションが行え、散歩での運動効果も得られる犬を活用。散歩、触れ合う事でアニマルセラピーとした。

- ②散歩、触れ合いにより検証期間は 1 か月間：朝 9：00 に介護職員が犬の散歩・触れ合いの声掛けを行い実施する。最低 20 分実施。散歩に拒否が有る、雨天の場合は室内で犬との触れ合う時間とした。
- ③研究前と研究後の認知機能の効果を図るため、「ミニメンタルステート検査」（以下 MMSE と略す）にて評価する。研究前と研究後の BPSD の度合いの評価と介護職員の負担度の評価を行える、BPSD 評価（以下 NPI-Q と略す）も用い評価する。NPI-Q では職員負担度を図る事と職員の感じ方により点数にばらつきが有るため、担当する係の職員 7 人に評価させ、平均値で算出した。
- ④アニマルセラピーを実施する前と直後に、A 氏の日頃の状態をベースに 3 段階に分け設定。実施前と実施後の気持ちの変化を評価する事とした。
- ⑤本研究後、本研究を通しての職員負担について、係りの職員 7 名を対象にアンケートを取る。

《4. 取り組みの結果》

- ・アニマルセラピーでは、散歩には拒否される事もあったが、触れ合いには拒否無く実施出来た。回数を重ねることにより「ちびちゃんが来た」「この子は頭がいいの」「また遊ぼうね」と話され犬との関係性が構築されていた。
- ・本研究実施前は MMSE に集中することが出来ない精神状態であり、結果 4 点であったが、本研究後の MMSE では、MMSE に集中し取り組む事が出来た為、10 点と数値の向上が見られた。
- ・NPI-Q の結果、症状全体の平均 21→20.85 点/30 点 介護者負担度平均 22.2→21 点/50 点（※数値が高いほど重度）と全般的に数値が下がり BPSD の症状、介護者負担度の緩和が見られている。
- ・A 氏の日頃の状態をベースに 3 段階に分け実施前と実施直後の気持ちの変化を図ったが、穏やかな状態が多く実施前と実施後に変化は殆ど見られなかった。だが、アニマルセラピー中では帰宅の訴えや、他のご利用者に注意されること等は殆ど無く、職員との会話も弾み穏やかな状態で取り組まれていた。

《5. 考察、まとめ》

NPQ-I では、興奮…2.71→2.42 点 不安…2.42 点→2.00 点 易怒性…2.14 点/3 点 うつ…1.14 点/3 点と、リラックス効果に付随する症状の数値が、うつ症状を除いて、症状の軽減がみられており、アニマルセラピーでのリラックス効果が得られたと考える。また本研究実施前より、音楽療法、カラオケ等の取り組みには、気持ちが落ち着かなくなり取り組めなかったが、研究後では、職員の声掛けを聞き入れてもらえる事が増え、コミュニケーションが取れる様になった。そのことから、職員の負担軽減に繋がり、音楽療法等、カラオケ等の取り組みに参加して頂く事ができ A 氏の QOL は向上された。研究後に本研究に携わった職員への負担軽減についてのアンケートを取った結果、A 氏のとのコミュニケーションが取れた事、職員同士、共通の認識で、BPSD 軽減に向けて共有しながら取り組めた事が良かったとの意見が多く、職員が一丸となり思いに沿ったケアを模索できた事も介護者の負担の軽減に繋がったと考えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

Mini-Mental State Examination (http://yoshiya-hasegawa.com/life_doctor/mmse.pdf)
BPSD 評価(NPI-Q)(sakurapas.com/images/guide/bpsd.pdf)

《8. 提案と発信》

アニマルセラピーでは、ご利用者により効果に違いはあるが、動物の癒しの力は大きいものと感じる。また本研究では、「リラックス効果」「BPSD の軽減」に着目したが、動物の関わりで、社会性の向上、職員や地域の方との会話の機会が増え、毎日の散歩での生活習慣の改善等も見られた。様々な効果が期待でき認知症の方に有用な取り組みだと感じた。